

第2回薬剤耐性対策のための
新規抗菌薬開発の促進に関する意識調査
調査結果報告書

2023年4月

日本製薬工業協会国際委員会

はじめに

ペニシリンの発見以降、多くの抗菌薬が開発され、感染症により命を落とすことが少なくなりました。一方で地球上の様々な場面で抗菌薬が繁用されるようになると、既存の抗菌薬が効かない薬剤耐性（AMR）菌が新たな脅威として出てくるようになりました。この薬剤耐性菌の問題は、このまま何もしなければ、2050年には全世界の死者数のがんで亡くなる方を上回る1000万人超にも昇るとされ、また、2008年のリーマンショック並みの経済的なダメージを被ると言われています。これら薬剤耐性菌と戦うためには新たな抗菌薬を産み出す必要があるのですが、近年は多くの企業がこの領域から撤退し、新たな抗菌薬の研究開発が大きく停滞しています。その理由として、抗菌薬の使用は、新たな耐性菌を生み出さないためにできるだけ機会を減らす限定的なものになること、よって抗菌薬の開発に成功しても発売までの投資に見合う回収が見込めないことが挙げられます。近年では、米国の新興製薬企業が新しい薬剤耐性菌の治療薬開発にチャレンジし、発売にようやくこぎつけたにもかかわらず、開発投資を回収できず倒産した事例もありました。

この喫緊の課題への対応として、抗菌薬の研究開発に対する持続可能で堅固な投資を誘引する新たな枠組みを創出するために、製薬協はAMRアライアンス・ジャパンメンバーの一員として、また、日経・FT感染症会議アジア・アフリカ医療イノベーションコンソーシアムAMR部会の一員として、プル型インセンティブ（国が抗菌薬の研究開発を促進することを目的として上市後の売上を保証する等のインセンティブ）導入等、日本のAMR対策を具体的に政府と国民に提言してきました。

また2020年、製薬協加盟企業を含む世界の24の製薬企業が、非政府系の利害関係者とも提携し、10億米ドル規模の研究開発支援のためのファンド「AMR Action Fund」を立ち上げました。同ファンドは2030年までに新規抗菌薬を2～4剤製品化し、患者さんに届けることを目指す画期的な取り組みであり、世界の製薬業界団体の母体である国際製薬団体連合会

（IFPMA）のイニシアチブでもあります。製薬協はIFPMA加盟団体として当ファンドの設立に寄与し、AMR対策としての新規抗菌薬の研究開発促進策、特にプル型インセンティブの国内制度導入を目指しアドボカシーを進めています。

このたび、この活動の一環として、第2回目の一般市民の方々が持たれているAMRや抗菌薬開発に対する意識調査を実施いたしました。この調査結果を今後の活動に反映させていきたいと考えていますので、ぜひ報告書をご一読いただき、皆様から多くのご意見・ご指摘をいただければ幸いです。

2023年4月
日本製薬工業協会
国際委員会
AMRアドボカシータスクフォース

目次

● 調査実施要領.....	4
➤ 調査目的.....	4
➤ 調査設計.....	4
➤ 回答者のプロフィール.....	4
● 調査結果の見方.....	6
● 調査結果の要約.....	7
● 調査結果の解説.....	8

調査実施要領

1. 調査目的

薬剤耐性（AMR）に対する一般市民の認知度や理解度、抗菌薬開発に対する意識の実態を把握し、AMRアドボカシーの基礎資料とする。今回は第2回目の調査である。

※第1回目の調査期間：2021年7月30日～8月3日

2. 調査設計

- ①地域 : 全国
- ②対象 : 20歳以上の男女
- ③標本数 : 2400例
- ④抽出方法 : 調査機関パネルより性年代人口構成比で無作為抽出
- ⑤調査方法 : インターネット
- ⑥調査期間 : 2022年12月23日～12月26日
- ⑦調査機関 : 楽天インサイト株式会社

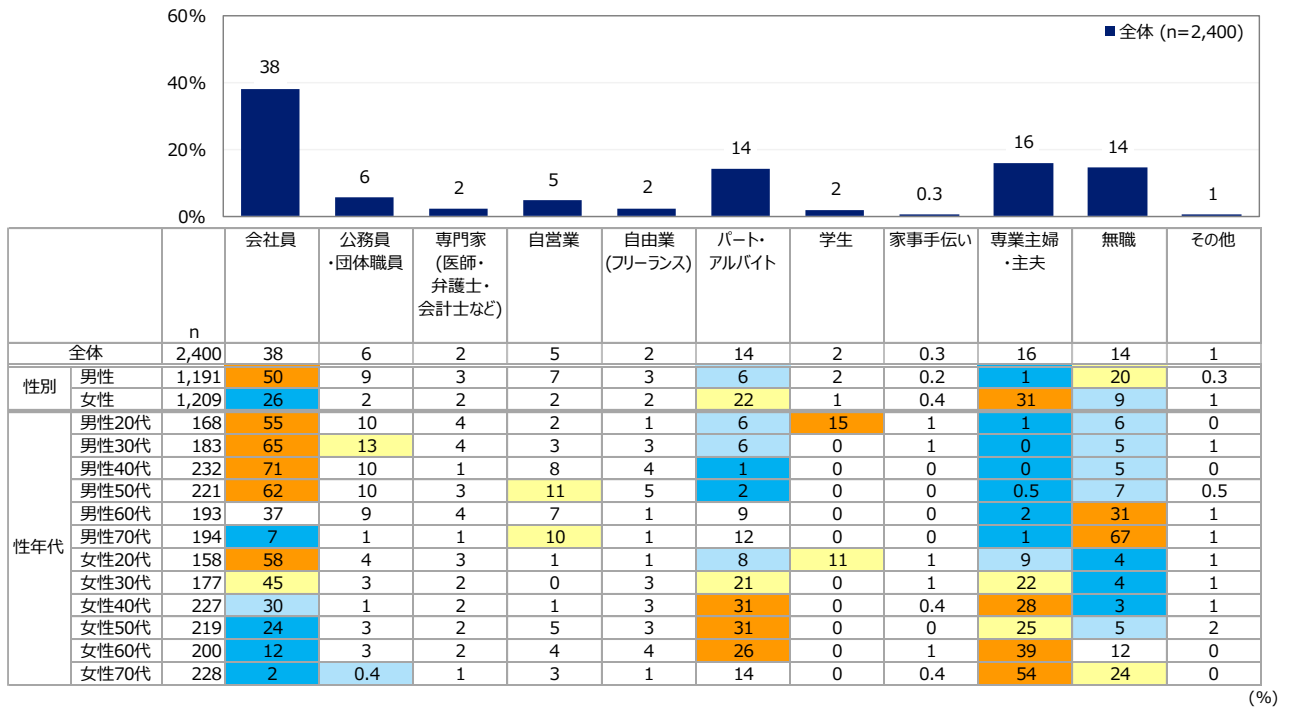
3. 回答者のプロフィール

性・年代

総数		n=2,400	
性別		男性	女性
		n=1,191	n=1,209
性年代	20代	n=168	n=158
	30代	n=183	n=177
	40代	n=232	n=227
	50代	n=221	n=219
	60代	n=193	n=200
	70代	n=194	n=228

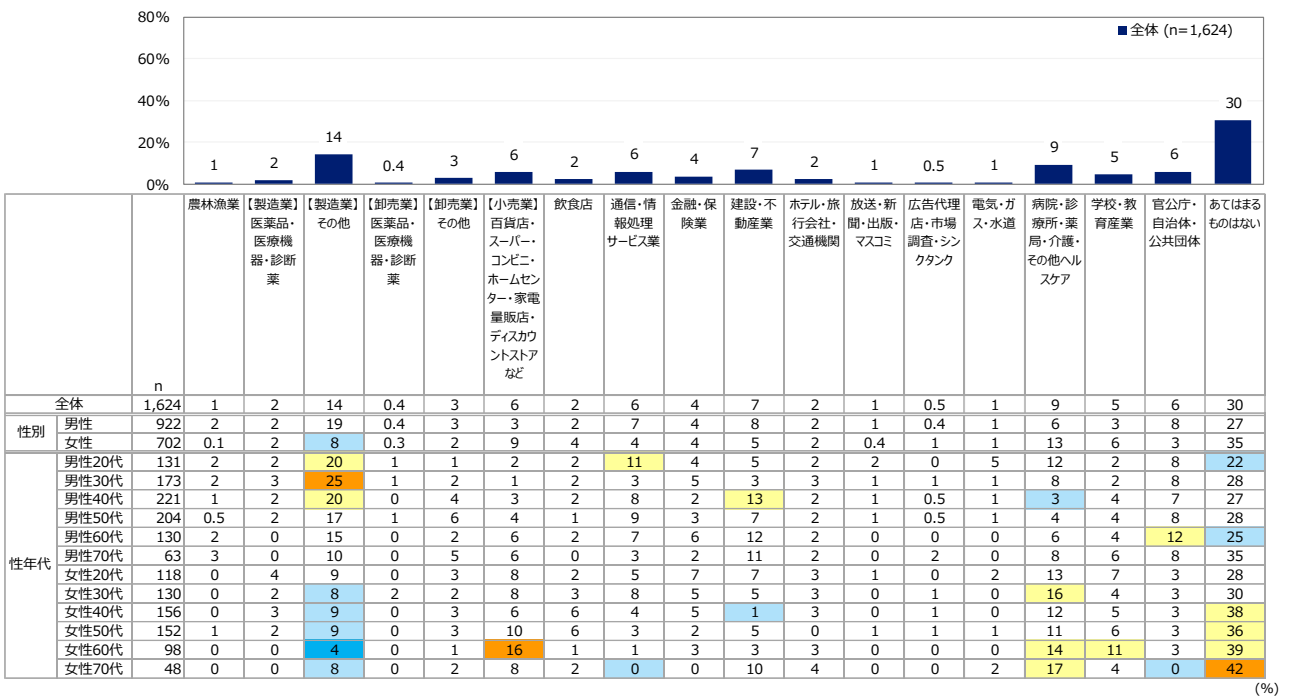
※厚生労働省 人口動態調査（2021年10月1日現在）に基づき性年代別に回収

職業



業種

ベース：職業で有職者と回答した人



4. 調査結果の見方

用語

- ・「ベース」は、質問をした対象者を示している。回答の割合はベースを母集団として示している。回答者が全員の場合、記載なし。
- ・「医療資格あり」とは、本意識調査において実施した質問「お持ちの医療系資格がありましたらお知らせください」において「医師・薬剤師・看護師・准看護師・助産師・臨床検査技師・臨床工学技士・理学療法士・歯科医師・歯科衛生士・保健師・介護福祉士・社会福祉士・その他」のいずれかを選択した回答者の集団を指す。
- ・「感染症で苦勞あり」とは、Q.2において”自身もしくは周囲で 抗菌薬・抗生物質の使用で症状が治りにくかったり、再発した経験がある”を選択した回答者の集団を指す。
「感染症で苦勞なし」とはそれ以外の集団を指す。

数値

- ・値基数を 100%とし、原則としては小数第 1 位を四捨五入し整数で表示した。四捨五入していることから合計が 100%にならない場合がある。
また、グラフ中で数値の低いものについては数値を表記していない場合がある。
また、2つ以上の選択肢を加える場合、実数から再算出するので、表示上の加算した数値と一致しないことがある。
- ・複数回答質問に対し、複数の回答を認めたもので、値の合計は 100%を超えることが多い。
- ・0、－あるいは無印値が、0 または 0.05 に満たなかったものを表示。

調査結果の要約

- これまでに抗菌薬・抗生物質を「使用したことがある」と回答した割合は、前回と同様、全体の60%であり、そのうち「症状が治りにくかったり再発した経験がある」と回答した割合は28%で前回(29%)と同様であった。
- 薬剤耐性を「知っている」と回答した人は、説明内容を読んで思い出した人を含めると38%であり、言葉だけ聞いたことがある人を含めると58%で、どちらも前回調査(39%と59%)と同様であった。
- 薬剤耐性について「怖いと思うか」との質問に対し「そう思う」「ややそう思う」(TOP2)と回答した割合は84%と前回(85%)と同様であった。一方、「ご自身に関係あると思うか」に対し「そう思う」「ややそう思う」(TOP2)と回答した割合は56%(前回は57%)となっており、「怖いと思うか」と比べ低い結果であった。
- 研究開発から撤退している製薬企業が増えていることや、海外において開発に成功した会社が利益を上げられずに倒産に追い込まれる状況について、「将来的に社会に悪影響があると思うか」との質問に対して「そう思う」「ややそう思う」(TOP2)と回答した割合は前回(74%)から減少したものの68%であったが、「ご自身に悪影響があると思う」では53%となっており、社会に悪影響があるものの、自分事としてとらえていないと推測された。
- 抗菌薬の研究開発促進に必要なこととして最も選択されているのは「国からの製薬企業への研究開発の財政的支援」である一方で、「国から製薬企業への販売後の利益確保」を選択した割合は財政的支援に比べ20ポイント以上低く、プル型インセンティブが必要だと考えている人の割合は相対的に低いという結果であった。
- プル型インセンティブの認知度は「聞いたことはある」を含めても前回(17%)と同様の全体で15%となっており、医療資格ありでも32%(前回は32%)と低い結果であった。
- プル型インセンティブの必要性について「今すぐ必要だと思う」「今すぐ必要ないが、将来的に必要だと思う」と回答した割合は67%(前回71%)であり、これは財源を税金とした場合でも64%(前回71%)と同様であった。

調査結果の解説

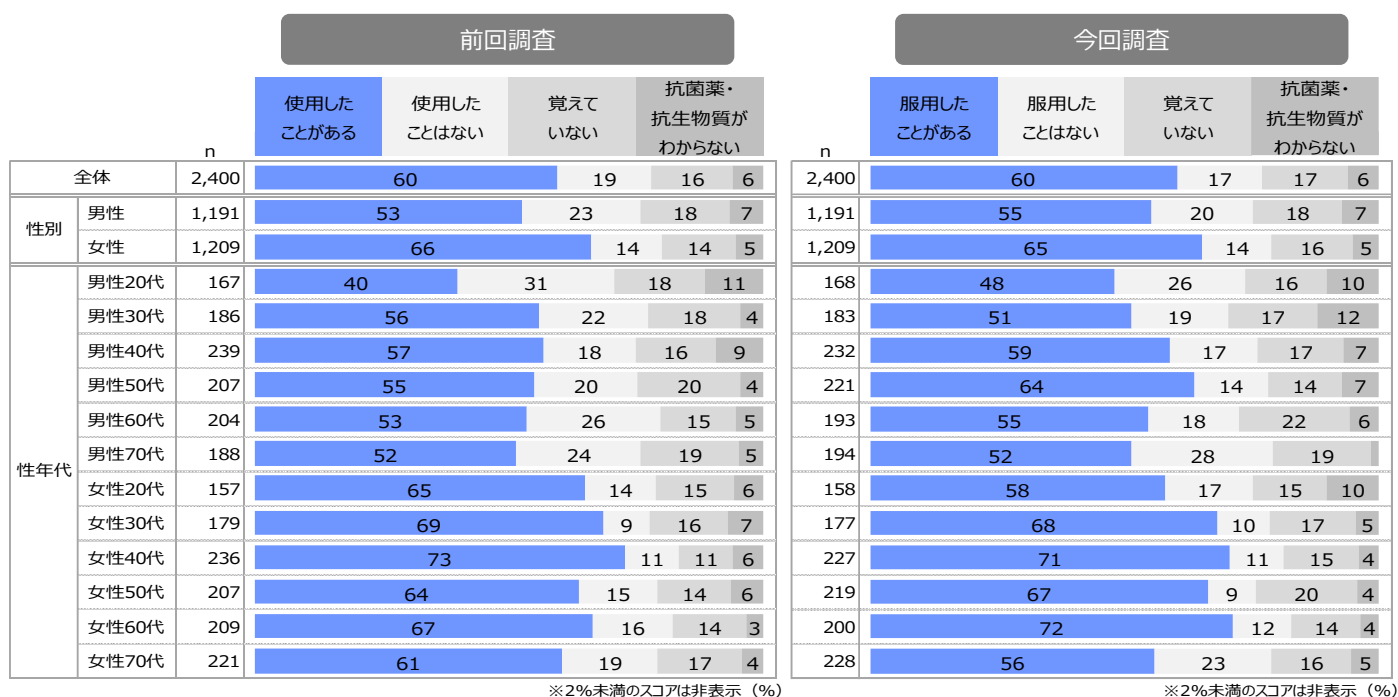
Q1.これまでに抗菌薬・抗生物質を服用したことはありますか。※例えば肺炎、皮膚感染症、中耳炎、尿路感染症などに処方されます。

※インフルエンザで使用する薬（タミフル、イナビルなど）は抗菌薬・抗生物質とは異なります。

考察：

「使用したことがある」の割合は、前回と同様であった。

- 「使用したことがある」の割合は全体で見た場合、前回と同様、60%であった。
「使用したことがある」の割合は女性の方が高く、
性年代別では、20代男性以外は「使用したことがある」の割合が半数を超えていた。



Q2.これまでになんらかの病気において、抗菌薬・抗生物質を服用しても症状が治りにくかったり、再発した経験はありますか。
またご家族や親戚など身近な方で、同様の経験をした方はいますでしょうか。

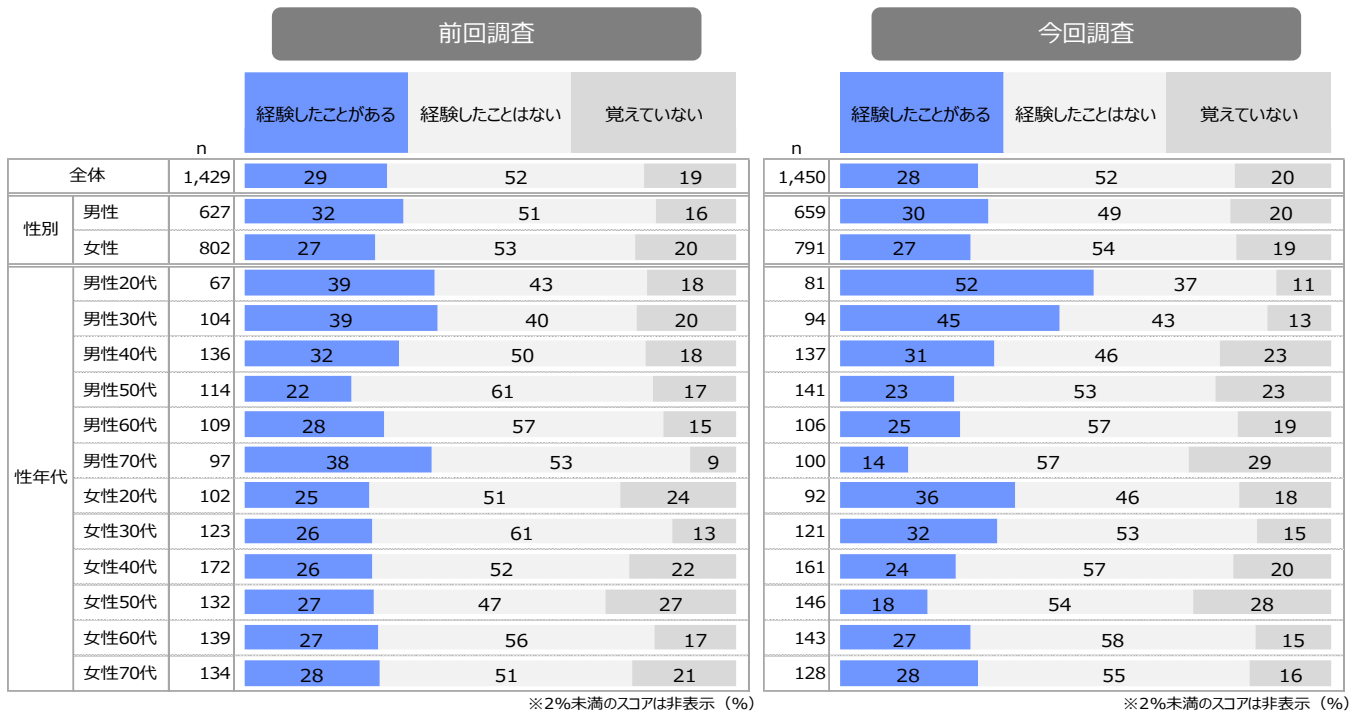
ベース：抗菌薬・構成物質使用経験あり

<回答者本人>

考察：

自身が「経験したことがある」と回答した割合は、前回と同様であった。

- 抗菌薬・抗生物質使用経験者のうち、28%は自身が「経験したことがある」と回答した。「経験したことがある」割合は、男女とも若い世代で高い傾向が見られた。



ベース：抗菌剤・抗生物質が分からない人以外

<回答者のご家族や親戚>

考察：

回答者の身近な人が「経験したことがある」と回答した割合は、前回と同様であった。

- 抗菌薬・抗生物質使用経験の有無が分からないと回答した人以外のうち、ご家族や親戚など身近な人が「経験したことがある」と回答した割合は、前回と同様、13%であった。
- 若い世代の回答者の方が、ご家族や親戚など身近な人が「経験したことがある」と認識している割合が高かった。

		前回調査			今回調査				
		経験した方がいる	経験した方はいない	分からない	経験した方がいる	経験した方はいない	分からない		
		n			n				
全体		2,258	13	45	42	2,254	13	42	44
性別	男性	1,113	13	44	43	1,106	13	41	45
	女性	1,145	13	45	42	1,148	13	43	44
性年代	男性20代	148	18	36	47	151	23	34	44
	男性30代	178	20	39	41	161	19	34	47
	男性40代	217	13	40	47	216	15	38	48
	男性50代	198	8	45	47	205	12	37	52
	男性60代	193	10	52	38	182	10	51	39
	男性70代	179	11	54	36	191	5	52	42
	女性20代	148	17	39	45	142	15	37	48
	女性30代	167	16	46	39	169	18	34	48
	女性40代	222	14	43	43	218	16	45	39
	女性50代	194	14	38	47	210	10	40	50
	女性60代	202	13	53	33	193	13	52	35
	女性70代	212	6	51	42	216	9	48	43

※分析軸の性別、性年代は回答者本人の属性

※2%未満のスコアは非表示 (%)

※2%未満のスコアは非表示 (%)

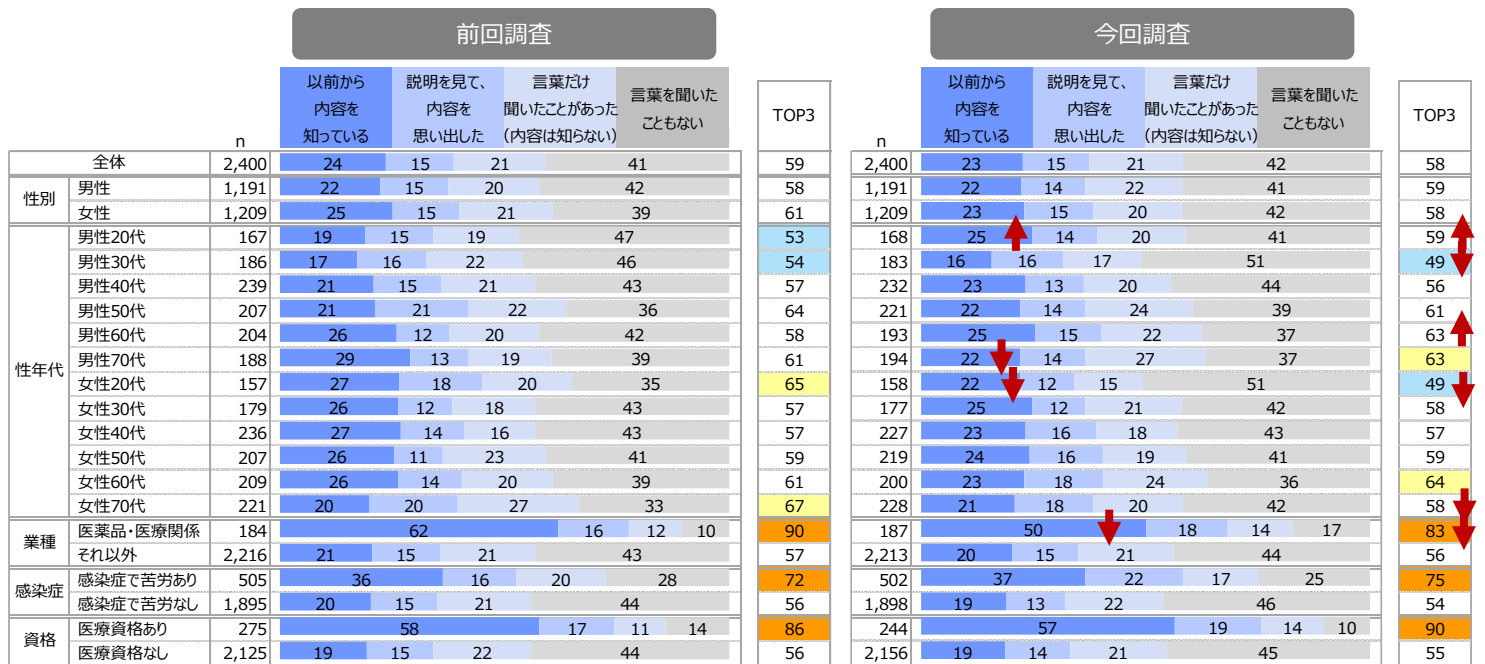
Q3.薬剤耐性（AMR：Antimicrobial Resistance）を知っていますか。

薬剤耐性とは：細菌やウイルスに対して、それまで効いていた薬が効かなくなる（効果が小さくなる）こと

考察：

薬剤耐性（AMR）の内容まで認知しているのは、前回と同様、全体で2割強

- 薬剤耐性(AMR)（TOP3: 「以前から内容を知っている」～ 「言葉だけ聞いたことがあった」）の認知率は、前回とほぼ同等の58%であった。
- セグメント別の認知率は、性別では差はなかったが、その他のセグメントでは“医薬品・医療関係”“感染症で苦勞あり”“医療資格あり”の方の認知率が高かった。性年代別では前回認知率が高かった”女性20、70代”で10ポイント程あるいはそれ以上低下していた。



※TOP3:「以前から内容を知っている」+「説明を見て、内容を思い出した」+「言葉だけ聞いたことがあった（内容は知らない）」の計

※2%未満のスコアは非表示（%）

▲▼「以前から内容を知っている」やTOP3において前回から5pts以上増減がある

Q4.薬剤耐性（AMR:Antimicrobial Resistance）を知るようになった手段・情報媒体をすべてお知らせください。

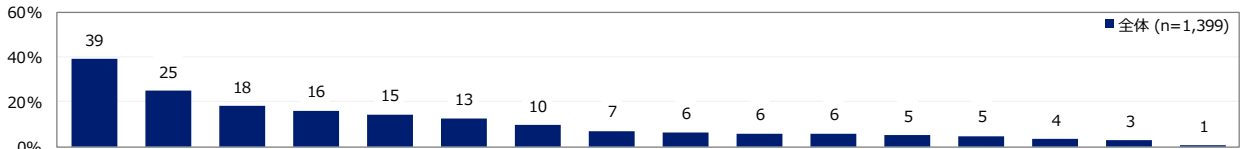
薬剤耐性とは：細菌やウイルスに対して、それまで効いていた薬が効かなくなる（効果が小さくなる）こと

考察：

薬剤耐性(AMR)の情報経路は「テレビ番組」の割合が最も高かった

- 「テレビ番組」の割合が39%で最も高く、次いで「医師や薬剤師などの医療従事者からの説明」であった。“女性20、30代”、“医薬品・医療関係”、“感染症で苦勞あり”、“医療資格あり”では、後者の割合の方が最も高かった。
- “男女60、70代”では「新聞」、「男女20代、女性30代」では「学校の授業」などの割合も高い傾向であった

ベース：AMR 認知者



	n	テレビ番組	医師や薬剤師などの医療従事者からの説明	新聞	家族、知人、友達	雑誌・本	病院やクリニックにおいてある冊子やポスター	Yahoo!やMSNなどのポータルサイトのネット記事	医療機関のウェブサイト	学校の授業	疾患情報のまとめサイト	職場の同僚・上司など	TwitterやLINE、Facebook、InstagramなどのSNS	YouTubeなどの動画サイト	厚労省や自治体のウェブサイト	日本製薬工業協会・製薬会社のウェブサイト	その他
全体	1,399	39	25	18	16	15	13	10	7	6	6	6	5	5	4	3	1
性別																	
男性	697	43	21	21	12	17	12	12	9	6	7	6	6	7	5	4	0.4
女性	702	35	29	15	20	12	13	7	6	7	5	6	4	3	2	2	1
性年代																	
男性20代	99	27	21	6	16	10	11	13	11	24	8	9	14	17	9	8	0
男性30代	90	30	22	7	14	16	10	10	9	3	11	10	10	6	6	3	1
男性40代	130	39	22	16	8	18	12	15	12	5	5	5	5	7	7	4	1
男性50代	134	48	17	20	15	14	16	12	10	3	8	6	5	5	1	1	0
男性60代	121	50	18	28	8	22	9	13	6	3	5	5	4	6	4	4	1
男性70代	123	59	24	41	12	20	15	7	5	1	7	1	0	3	5	2	0
女性20代	78	21	23	1	26	3	17	5	8	19	6	6	10	3	3	1	1
女性30代	103	19	27	1	12	9	16	9	9	16	9	14	8	5	2	5	1
女性40代	130	33	29	8	24	11	11	8	6	6	2	8	7	3	2	1	0
女性50代	130	38	27	16	21	15	11	5	5	3	3	5	1	2	2	2	3
女性60代	128	45	29	27	18	18	13	10	5	2	7	3	3	5	3	4	0
女性70代	133	44	35	30	21	13	13	7	3	0	4	2	0	1	1	2	1
業種																	
医薬品・医療関係	155	19	41	8	12	12	12	7	14	17	7	21	5	8	5	6	2
それ以外	1,244	41	23	19	17	15	13	10	6	5	6	4	5	5	3	3	1
感染症																	
感染症で苦勞あり	378	31	37	15	18	15	17	11	13	9	9	9	8	7	7	6	1
感染症で苦勞なし	1,021	42	20	19	15	14	11	9	5	5	5	5	4	4	2	2	1
資格																	
医療資格あり	219	19	40	9	9	15	13	6	15	23	7	15	8	9	5	6	2
医療資格なし	1,180	43	22	20	17	14	13	10	6	3	6	4	5	4	3	2	0.4

※全体で降順ソート

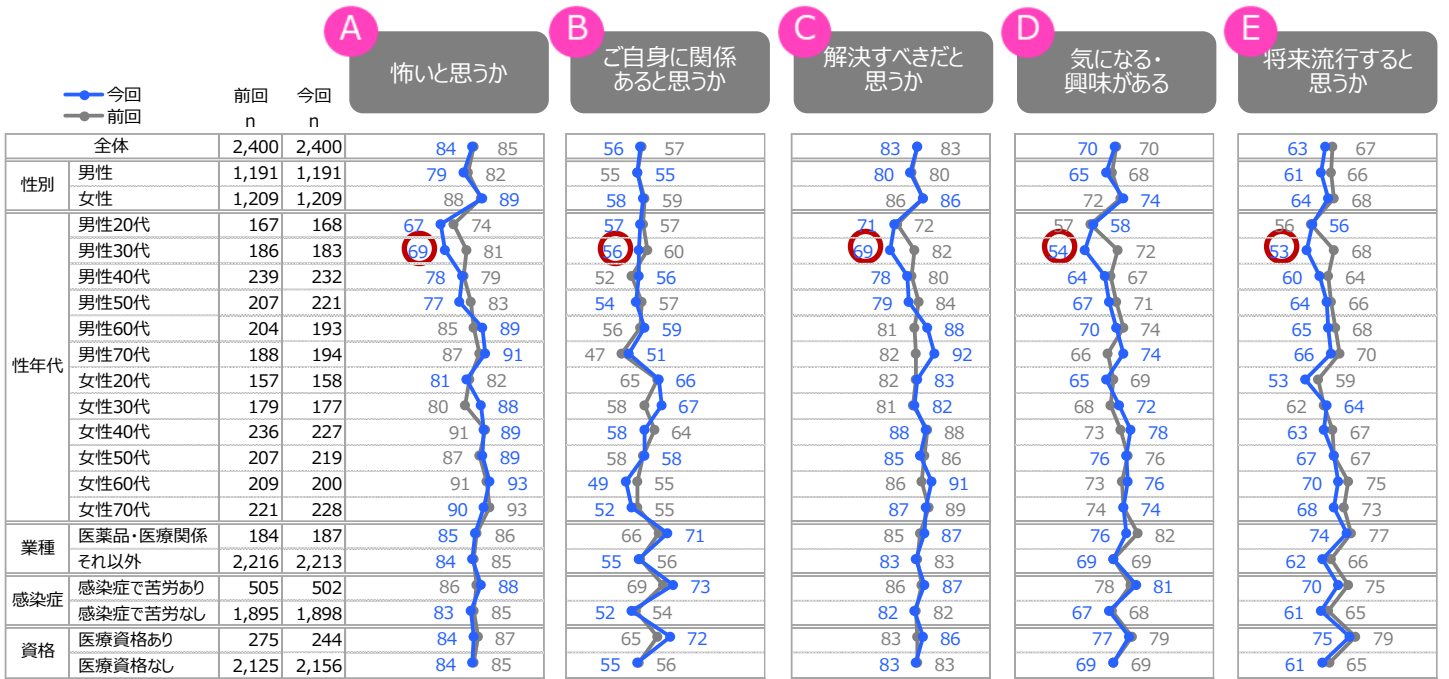
(%)

Q5.薬剤耐性（AMR：Antimicrobial Resistance）についてあてはまるものをお知らせください。
 薬剤耐性とは：細菌やウイルスに対して、それまで効いていた薬が効かなくなる（効果が小さくなる）こと

考察：

全体の85%(TOP2*)が薬剤耐性(AMR)を「A:怖い」と思っている

- そう思う(TOP2*)の割合については「A:怖いと思うか」の割合が最も高く、次いでほぼ同等で「C:解決すべきと思うか」であった。全体的に前回調査と同様の割合であった。
- A,Cは性別、B,Eについては業種や資格、Dは全てのセグメント間で差が見られた。なお、感染症はA~Eの全てで差が見られた。”男性30代”はすべての項目で前回よりも減少しており、他の性年代よりも変動が大きかった。



*TOP2（そう思う+ややそう思う）のスコア

(%)

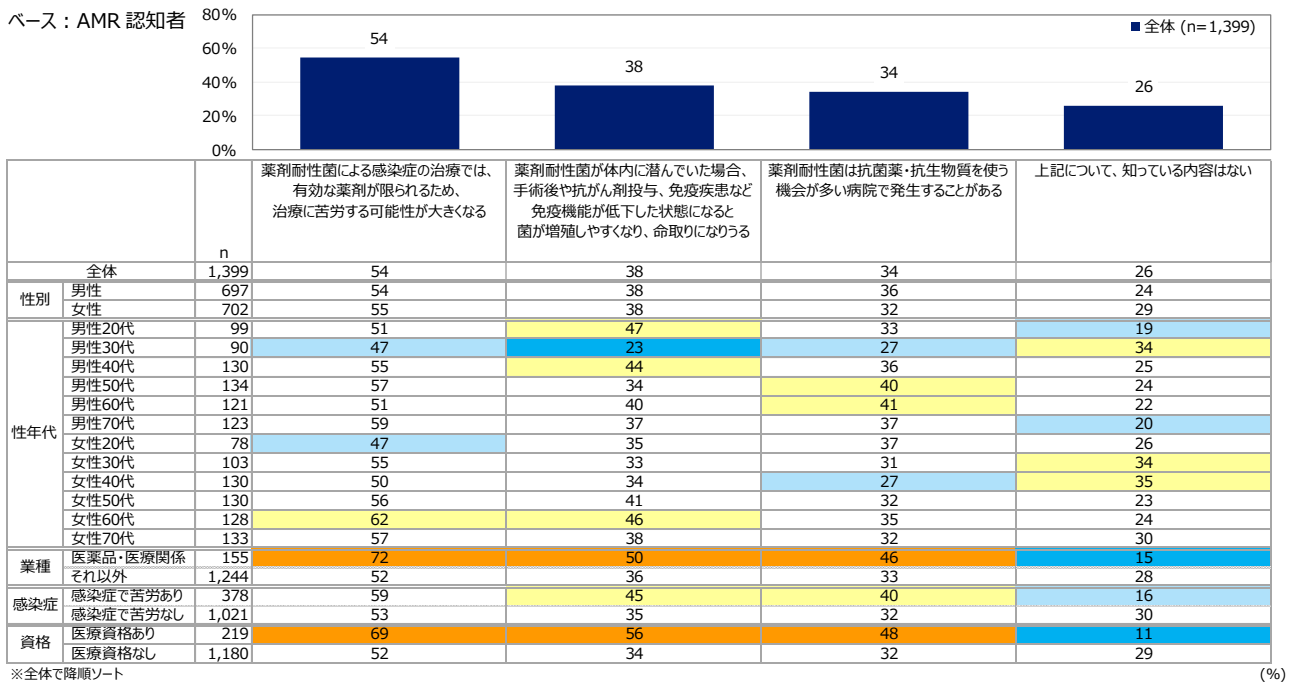
Q6.薬剤耐性（AMR）に関する以下内容のうち、ご存知の内容をすべてご回答ください。
（いくつでも）

薬剤耐性とは：細菌やウイルスに対して、それまで効いていた薬が効かなくなる（効果が小さくなる）こと

考察：

「薬剤耐性菌による感染症の治療では、有効な薬剤に限られるため、治療に苦勞する可能性が大きくなる」の認知率が54%で最も高かった

- 「薬剤耐性菌による感染症の治療では、有効な薬剤に限られるため、治療に苦勞する可能性が大きくなる」の割合が54%で最も高かった。「3つとも知らない」と回答した割合は26%であった。
- どの内容においても、「医薬品・医療関係」「感染症で苦勞あり」「医療資格あり」の方の認知率が高かった。
- 性別では違いは見られなかったが、性年代別では「女性60代」で全体よりも高い内容が複数見られた。



Q7.薬剤耐性（AMR）に関する以下内容のうち、ご存知の内容をすべてご回答ください。
（いくつでも）

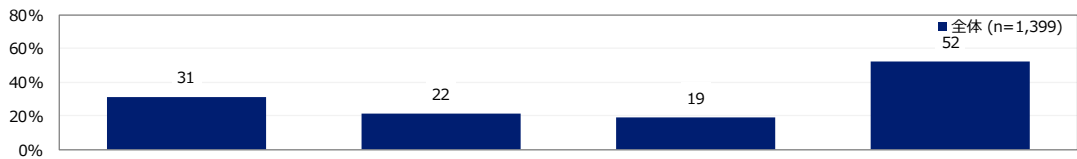
薬剤耐性とは：細菌やウイルスに対して、それまで効いていた薬が効かなくなる（効果が小さくなる）こと

考察：

「薬剤耐性菌は大腸菌など身近な細菌にも存在し、耐性菌と共存することで、耐性のない同種の菌や異なる種の菌が耐性化することがある」の認知率が31%で最も高かった

- 「薬剤耐性菌は大腸菌など身近な細菌にも存在し～」の割合が31%で最も高かった。「3つとも知らない」と回答した割合は52%であった。
- どの内容においても、「医薬品・医療関係」「感染症で苦勞あり」「医療資格あり」の方が認知率が高かった。
- 性別では「男性」の認知率が高く、性年代別では「男性20代」で全体よりも高い内容が複数見られた。

ベース：AMR 認知者



		n	薬剤耐性菌は大腸菌など身近な細菌にも存在し、耐性菌と共存することで、耐性のない同種の菌や異なる種の菌が耐性化することがある	薬剤耐性菌は生物の中だけでなく、河川などの環境中にも発見されることがあり、環境からの感染も懸念されている	薬剤耐性菌はペットや家畜からも人に感染しうる	上記について、知っている内容はない
全体		1,399	31	22	19	52
性別	男性	697	34	26	21	46
	女性	702	29	18	17	59
性年代	男性20代	99	33	36	32	31
	男性30代	90	30	29	23	43
	男性40代	130	37	25	20	48
	男性50代	134	26	24	15	57
	男性60代	121	38	18	18	49
	男性70代	123	39	24	23	42
	女性20代	78	26	21	21	53
	女性30代	103	31	18	21	58
	女性40代	130	25	14	12	65
	女性50代	130	26	18	12	63
業種	医薬品・医療関係	155	46	37	27	38
	それ以外	1,244	30	20	18	54
感染症	感染症で苦勞あり	378	38	28	26	39
	感染症で苦勞なし	1,021	29	19	17	57
資格	医療資格あり	219	53	37	29	26
	医療資格なし	1,180	27	19	17	57

※全体で降順ソート

(%)

Q6.3.薬剤耐性（AMR）に関する以下内容のうち、ご存知の内容をすべてご回答ください。
 Q7.1.薬剤耐性（AMR）に関する以下内容のうち、ご存知の内容をすべてご回答ください。

考察：

- 以下の内容について、どちらも前回よりも認知率が低下していた。

ベース：AMR認知者

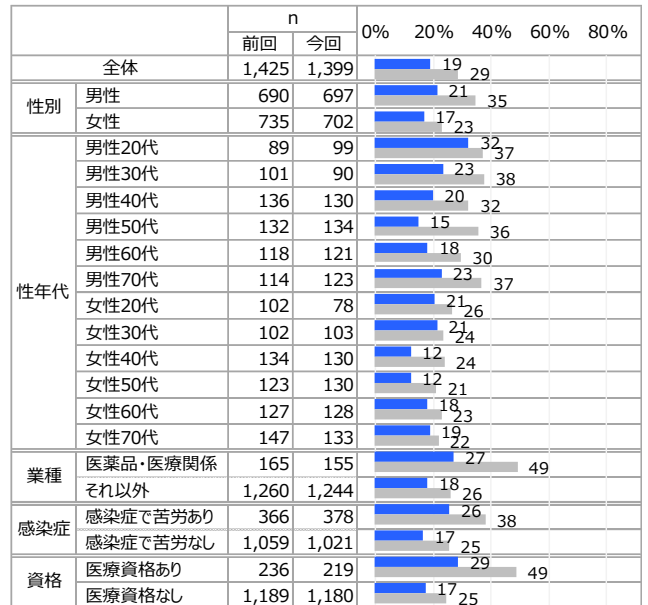
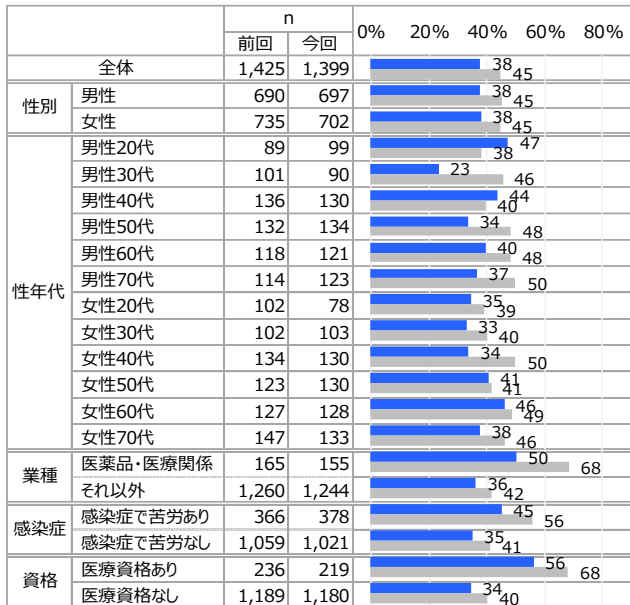
※前回調査とは聴取方法が異なるため参考

ベース：
AMR認知者

薬剤耐性菌が体内に潜っていた場合、
手術後や抗がん剤投与、免疫疾患など免疫機能が低下した状態になると菌が増殖しやすくなり、命取りになりうる

薬剤耐性菌はペットや家畜からも人に感染しうる

■ 今回
■ 前回



※ <前回>

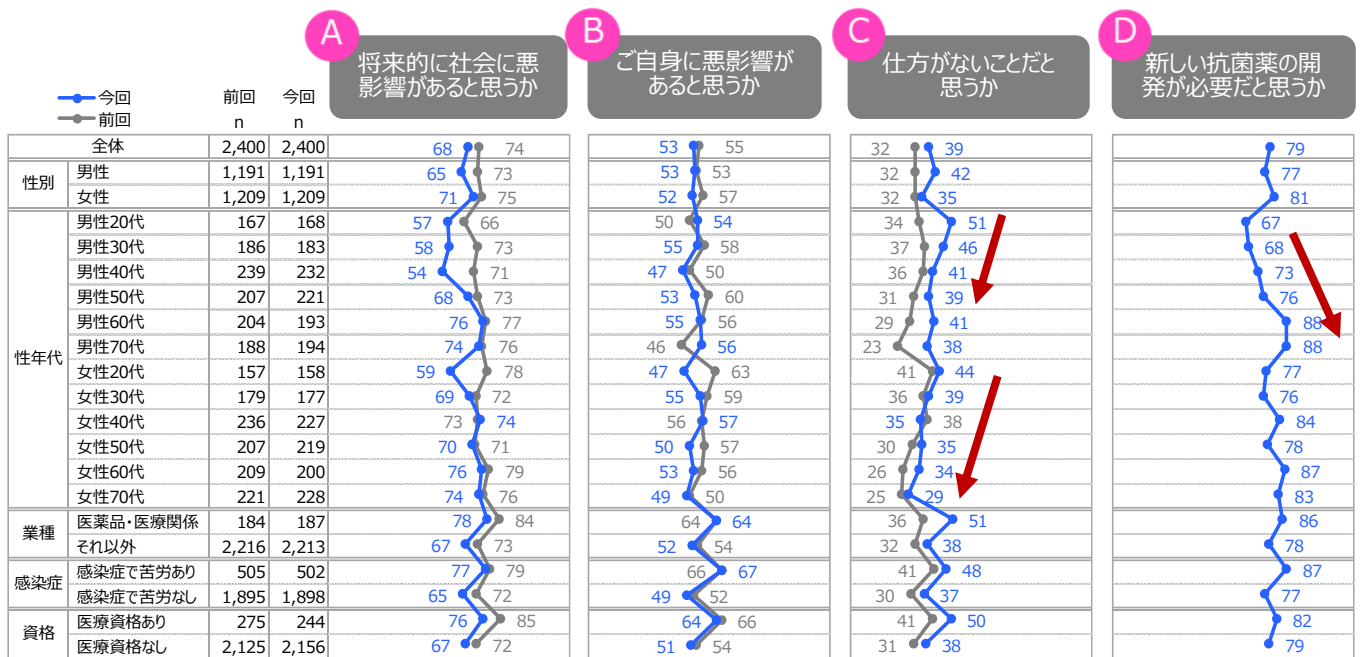
- ・薬物耐性菌を常在菌として保有していると、ストレス、手術後や抗がん剤投与後などの免疫機能が低下して菌が増殖し発症した場合、命取りになり得ることを知っていますか。
- ・薬物耐性菌はペットや家畜からも相互に感染しうることを知っていますか。

Q8.新しく開発される抗菌薬は AMR 感染症治療の切り札として扱われ、かつ短期間で治療することが求められます。そのため、使用量が制限され、収益性が良くないことから、新しい抗菌薬の必要性・重要性は認識しながらも、研究開発から撤退せざるを得ない製薬企業が増えています。また海外においては、開発に成功した会社が利益を上げられずに倒産する事例が発生しています。上記の内容について、あてはまるものをお知らせください。

考察：

抗生物質の研究開発から撤退する製薬企業の増加や倒産の状況においても、「D:新しい抗菌薬の開発が必要だと思う」(TOP2*)の割合は79%であった

- 「そう思う」(TOP2*)の割合は、Dが79%で最も高く、次いでAであった。前回は聴取したAの割合は減少していたが、Cの割合は増加していた。
- どの内容においても、「医薬品・医療関係」「感染症で苦勞あり」「医療資格あり」の方がTOP2*の割合が高かった。
- 性年代別では、Cにおいて年齢が高まるとTOP2の割合が減少する傾向が見られた。



*TOP2 (そう思う+ややそう思う) のスコア

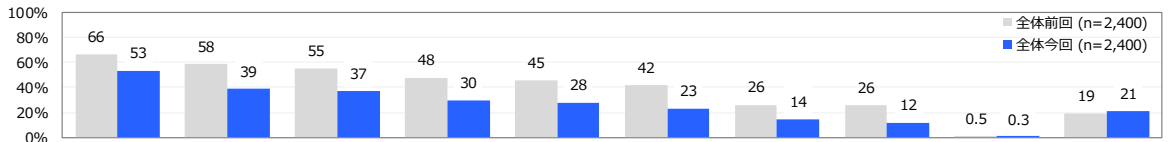
Q9.新しい抗菌薬・抗生物質の研究開発が促進されるために必要だと思うことをお知らせください。またその中でも、特に必要と思うものを上位3位までお知らせください。

<新しい抗菌薬・抗生物質の研究開発が促進されるために必要だと思うこと>

考察：

研究開発促進には、前回と同様、「国からの製薬企業への研究開発の財政的支援」が最も必要と考えられていた

- 前回と同様、どのセグメントでも「国からの製薬企業への研究開発の財政的支援」が最も選択されていた。ただし、前回から13ポイント減少していた。次いで、「製薬企業自身の研究会開発への投資促進」であった。
- セグメント別では、“男女60、70代”で「国からの製薬企業への研究開発の財政的支援」の割合が高かった。
 “男性60、70代”では「産官学協力体制の強化」の割合も全体よりも高い傾向が見られた。



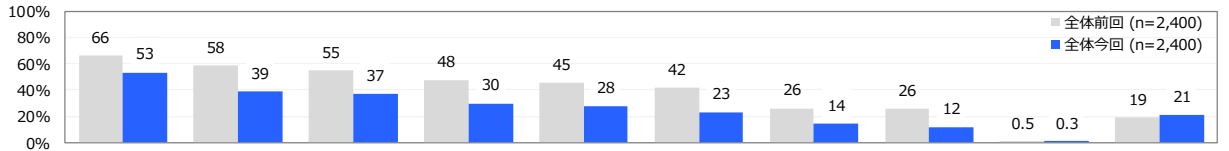
		n	研究開発促進のために必要だと思うこと											
			国からの製薬企業への研究開発の財政的支援	製薬企業自身の研究会開発への投資促進	人材の確保	国からの製薬企業への販売後の利益確保	産官学協力体制の強化	ベンチャー企業への支援	抗菌薬・抗生物質の利用頻度の増加	抗菌薬・抗生物質の設定価格の上昇	その他	特にないわからない		
全体	今回	2,400	53	39	37	30	28	23	14	12	0.3	21		
	前回	2,400	66	58	55	48	45	42	26	26	0.5	19		
性別	男性	今回	1,191	50	37	39	28	33	26	15	12	0.3	20	
		前回	1,191	63	56	57	47	50	45	29	28	1	17	
	女性	今回	1,209	57	40	35	31	23	20	14	11	0.2	21	
		前回	1,209	69	61	52	48	40	38	22	23	0.3	21	
性年代	男性20代	今回	168	39	33	39	33	27	24	20	15	1	25	
		前回	167	54	46	51	51	38	45	28	27	0	24	
	男性30代	今回	183	37	30	34	30	19	27	19	11	0	28	
		前回	186	60	55	54	44	39	41	32	32	0	18	
	男性40代	今回	232	50	31	39	29	31	20	14	10	0	23	
		前回	239	58	56	57	49	46	42	30	29	1	19	
	男性50代	今回	221	48	34	36	27	30	25	12	17	1	22	
		前回	207	61	56	56	46	55	44	30	26	2	14	
	男性60代	今回	193	65	46	45	25	47	30	16	11	0	11	
		前回	204	67	59	58	47	55	48	26	27	0	18	
	男性70代	今回	194	58	45	40	25	41	32	11	6	0	13	
		前回	188	77	65	68	43	67	53	31	28	0	11	
	女性20代	今回	158	45	29	34	32	14	20	11	11	0	28	
		前回	157	64	61	54	55	33	38	30	28	0	17	
		女性30代	今回	177	49	39	37	36	16	21	15	14	1	27
			前回	179	69	61	53	49	31	31	30	30	1	23
	女性40代	今回	227	57	42	33	32	19	19	15	13	0.4	17	
		前回	236	64	58	48	48	36	32	19	18	0.4	22	
	女性50代	今回	219	58	38	32	34	21	15	12	11	0.5	21	
		前回	207	70	59	50	46	42	36	25	21	0	22	
	女性60代	今回	200	65	42	36	32	29	20	15	9	0	20	
		前回	209	76	61	54	49	48	46	15	22	0.5	17	
	女性70代	今回	228	62	49	39	24	33	25	13	12	0	20	
		前回	221	72	63	53	46	48	43	20	24	0.5	22	

※今回全体で降順ソート

(%)

考察：

- 研究開発促進には、前回と同様、「国からの製薬企業への研究開発の財政的支援」が最も必要と考えられており、「業種」「感染症」「資格」のどのセグメントにおいても最も割合が高かった。
- なお、「感染症で苦勞あり」では「抗菌薬・抗生物質の利用頻度の増加」の割合が全体よりも高い傾向が見られた。



		n	国からの製薬企業への研究開発の財政的支援	製薬企業自身の研究開発への投資促進	人材の確保	国からの製薬企業への販売後の利益確保	産官学協力体制の強化	ベンチャー企業への支援	抗菌薬・抗生物質の利用頻度の増加	抗菌薬・抗生物質の設定価格の上昇	その他	特にないわからない	
全体	今回	2,400	53	39	37	30	28	23	14	12	0.3	21	
	前回	2,400	66	58	55	48	45	42	26	26	0.5	19	
業種	医薬品・医療関係	今回	187	57	42	37	34	26	22	18	19	1	14
		前回	184	68	60	51	56	47	44	26	29	2	17
	それ以外	今回	2,213	53	38	37	29	28	23	14	11	0.2	22
		前回	2,216	66	58	55	47	45	41	26	25	0.4	19
感染症	感染症で苦勞あり	今回	502	57	41	41	34	30	25	25	17	0.2	12
		前回	505	67	63	57	52	50	45	32	32	1	13
	感染症で苦勞なし	今回	1,898	52	38	36	29	27	23	11	10	0.3	23
		前回	1,895	66	57	54	46	44	41	24	24	0.4	21
資格	医療資格あり	今回	244	55	42	39	33	28	25	19	18	0.4	13
		前回	275	70	65	56	57	50	47	27	29	1	12
	医療資格なし	今回	2,156	53	38	37	29	28	23	14	11	0.2	22
		前回	2,125	65	58	54	46	45	41	26	25	0.4	20

※今回全体で降順ソート

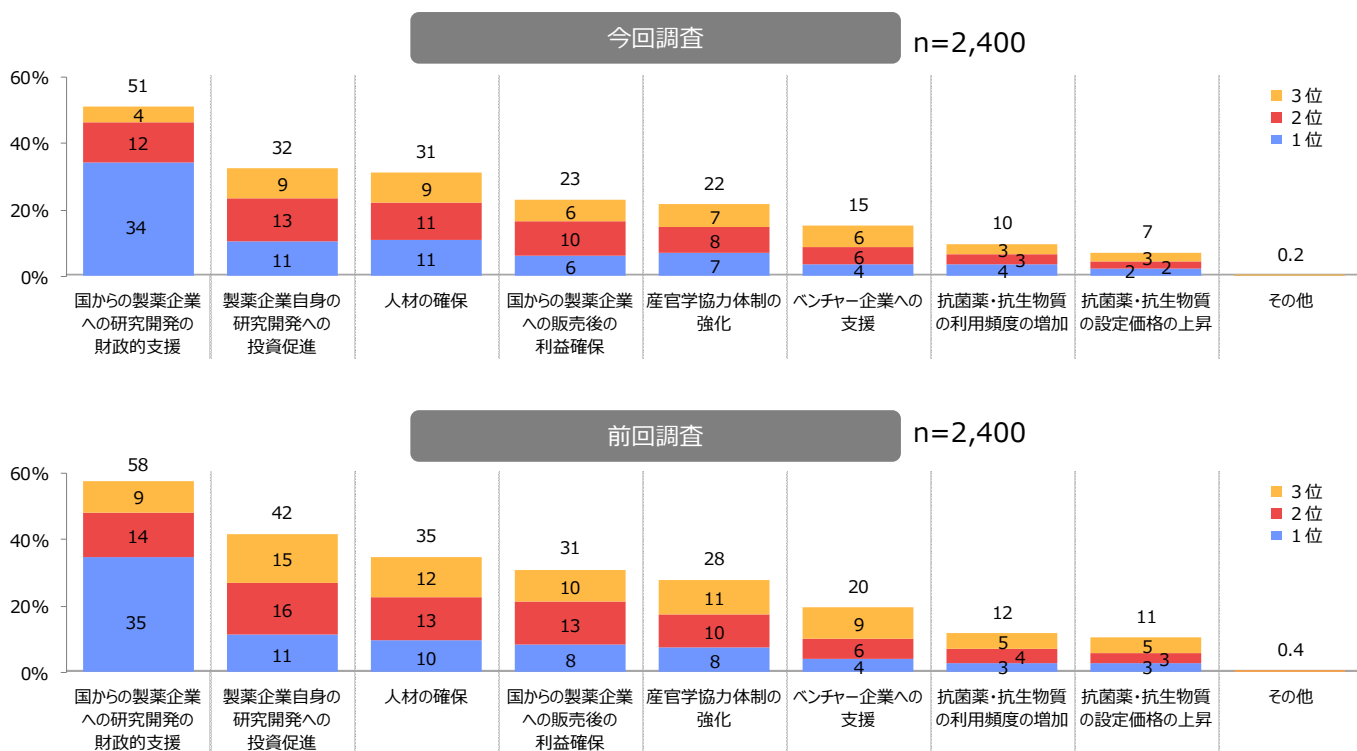
(%)

<新しい抗菌薬・抗生物質の研究開発が促進されるために必要だと思うことの中、特に必要と思うもの上位3位>

考察：

研究開発促進に必要なこと1位は、前回と同様、「国からの製薬企業への研究開発の財政的支援」の割合が最も高かった

- 研究開発促進に必要なことの1位として最も選択されているのは、前回と同様、「国からの製薬企業への研究開発の財政的支援」となっており、他の項目と差が見られた。
- 1～3位の積み上げでも同様に、「国からの製薬企業への～」の割合が最も高く、次いで「製薬企業自身の研究開発への投資促進」であった。

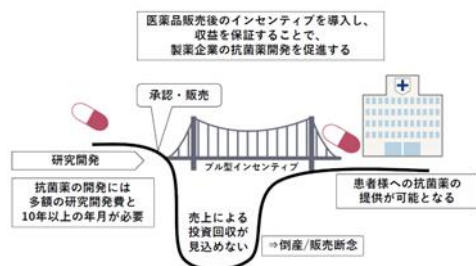


※今回 1～3 位計で降順ソート ※各順位の 2%未満のスコアは非表示 ※「特になし」は非表示

Q10.プル型インセンティブを知っていますか。

プル型インセンティブとは：通常の薬の開発は、企業が研究開発投資を行って、上市後製品を売り上げることで投資を回収しています。一方、抗菌薬は、使用条件を限定して使う必要があることから、企業が事業の持続可能性を見込めず、新規抗菌薬の開発が進んでいないのが現状です。これを解決するために、使用量に関係なく、開発企業への売り上げ等を補償するような制度（プル型インセンティブ）などが提案されています。

【提示資料】



考察：

プル型インセンティブの認知率(TOP2*)は、前回とほぼ同等の15%
「内容を知っている」は前回と同じ3%だった

- 認知率(TOP2*)は、前回と同様の15%であった。「内容を知っている」は前回と同じ3%。
- セグメント別のTOP2*の割合は、“医薬品・医療関係”“感染症で苦勞あり”“医療資格あり”でもう一方よりも割合が高く、性年代別では“男性20代”が最も割合が高く、前回よりも10ポイント高かった。

		前回調査			今回調査						
		n	内容を知っている	聞いたことはある	聞いたことがない	TOP2	n	内容を知っている	聞いたことはある	聞いたことがない	TOP2
	全体	2,400	3	14	83	17	2,400	3	13	85	15
性別	男性	1,191	4	17	79	21	1,191	4	16	80	20
	女性	1,209	1	11	87	13	1,209	1	9	90	10
性年代	男性20代	167	10	14	77	23	168	13	20	67	33
	男性30代	186	8	18	74	26	183	4	11	85	15
	男性40代	239	5	17	79	21	232	5	18	77	23
	男性50代	207	2	18	79	21	221	1	14	85	15
	男性60代	204	1	20	79	21	193	1	17	82	18
	男性70代	188	1	16	82	18	194	1	17	82	18
	女性20代	157	3	13	83	17	158	3	11	85	15
	女性30代	179	3	12	85	15	177	1	11	88	12
	女性40代	236	1	9	89	11	227	1	9	89	11
	女性50代	207	2	9	91	9	219	6	9	94	6
	女性60代	209	10	90	90	10	200	8	91	91	9
	女性70代	221	1	17	81	19	228	1	9	89	11
業種	医薬品・医療関係	184	7	19	74	26	187	5	16	80	20
	それ以外	2,216	3	14	83	17	2,213	2	12	85	15
感染症	感染症で苦勞あり	505	6	23	71	29	502	8	21	71	29
	感染症で苦勞なし	1,895	2	12	86	14	1,898	1	10	89	11
資格	医療資格あり	275	11	21	68	32	244	10	21	68	32
	医療資格なし	2,125	1	14	85	15	2,156	1	12	87	13

※TOP2:「内容を知っている」+「聞いたことはある」の計

※2%未満のスコアは非表示 29 -

※2%未満のスコアは非表示 (%)

Q11.プル型インセンティブについて、下記の説明で理解できましたか。

プル型インセンティブとは：通常の薬の開発は、企業が研究開発投資を行って、上市後製品を売り上げることで投資を回収しています。一方、抗菌薬は、使用条件を限定して使う必要があることから、企業が事業の持続可能性を見込めず、新規抗菌薬の開発が進んでいないのが現状です。これを解決するために、使用量に関係なく、開発企業への売り上げ等を補償するような制度（プル型インセンティブ）などが提案されています。

考察：

プル型インセンティブの説明に対する理解(TOP2*)は、前回から5ポイント減の54%

- プル型インセンティブの説明に対して「理解できた」(TOP2)の割合は、54%であった。TOP2*の項目のうち、「やや理解できた」の割合が前回から減少していた。
- セグメント別では、「医療資格あり」で全体よりも10ポイント以上、TOP2*の割合が高かった。

ベース：プル型インセンティブの内容を知っている方以外

前回調査

今回調査

	n	前回調査				TOP2	n	今回調査				TOP2
		理解できた	やや理解できた	あまり理解できなかった	理解できなかった			理解できた	やや理解できた	あまり理解できなかった	理解できなかった	
全体	2,329	11	48	29	11	59	2,339	11	43	31	15	54
性別												
男性	1,140	12	47	27	14	59	1,146	13	42	28	16	55
女性	1,189	11	48	32	9	59	1,193	9	45	33	14	53
性年代												
男性20代	151	9	48	23	21	56	147	12	41	23	24	53
男性30代	172	10	49	26	15	59	176	12	33	30	26	45
男性40代	228	14	44	25	17	59	221	14	39	29	18	53
男性50代	202	12	50	29	9	62	219	17	41	28	14	58
男性60代	202	15	45	28	12	60	191	13	50	28	9	63
男性70代	185	10	49	30	11	59	192	10	48	32	9	59
女性20代	152	13	53	24	11	65	153	9	37	29	25	46
女性30代	173	10	43	34	13	53	175	11	40	33	16	51
女性40代	232	9	50	35	6	59	223	9	46	31	15	54
女性50代	206	6	46	36	12	51	219	9	49	32	10	58
女性60代	208	12	51	31	6	63	198	8	46	38	8	54
女性70代	218	16	48	28	9	64	225	8	47	34	12	54
業種												
医薬品・医療関係	171	15	53	25	8	68	178	11	50	24	15	61
それ以外	2,158	11	47	30	12	59	2,161	11	43	31	15	54
感染症												
感染症で苦勞あり	474	16	51	25	8	68	463	14	48	25	12	63
感染症で苦勞なし	1,855	10	47	31	12	57	1,876	10	42	32	16	52
資格												
医療資格あり	245	15	54	24	7	69	219	11	55	24	11	66
医療資格なし	2,084	11	47	30	12	58	2,120	11	42	31	15	53

※TOP2:「理解できた」+「やや理解できた」の計

※2%未満のスコアは非表示 (%)

※2%未満のスコアは非表示 (%)

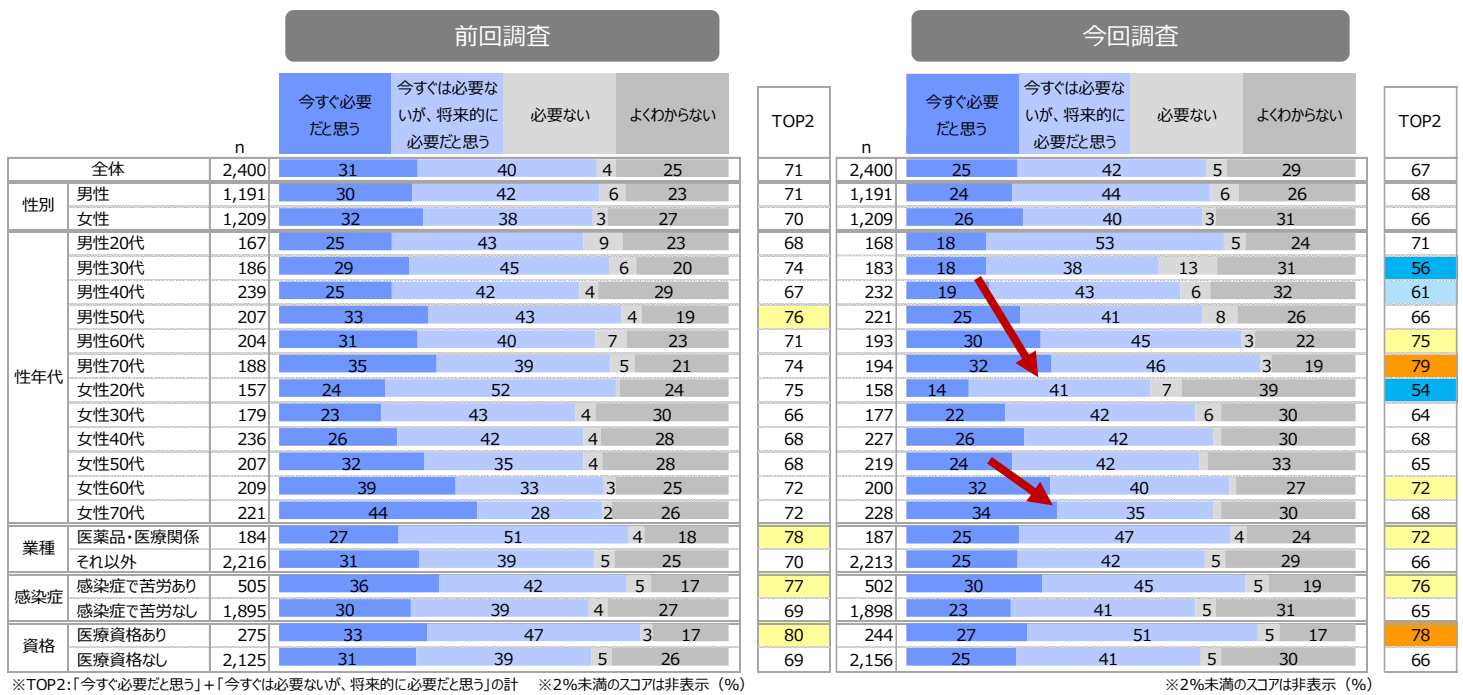
Q12.プル型インセンティブの必要性についてあなたのお考えをお知らせください。

プル型インセンティブとは：通常の薬の開発は、企業が研究開発投資を行って、上市後製品を売り上げることで投資を回収しています。一方、抗菌薬は、使用条件を限定して使う必要があることから、企業が事業の持続可能性を見込めず、新規抗菌薬の開発が進んでいないのが現状です。これを解決するために、使用量に関係なく、開発企業への売り上げ等を補償するような制度（プル型インセンティブ）などが提案されています。

考察：

プル型インセンティブが「今すぐ必要だと思う」は、前回から6ポイント減の25%

- 必要だと思う（TOP2*）の割合は、前回から4ポイント減の67%であった。”男性30代,50代や女性20代”で前回から10ポイント以上減少していた。全体よりも10ポイント以上高いセグメントは、”男性70代”や”医療資格あり”。「今すぐ必要だと思う」の割合は25%で、”男女60代以上”や”感染症で苦勞あり”で高かった。



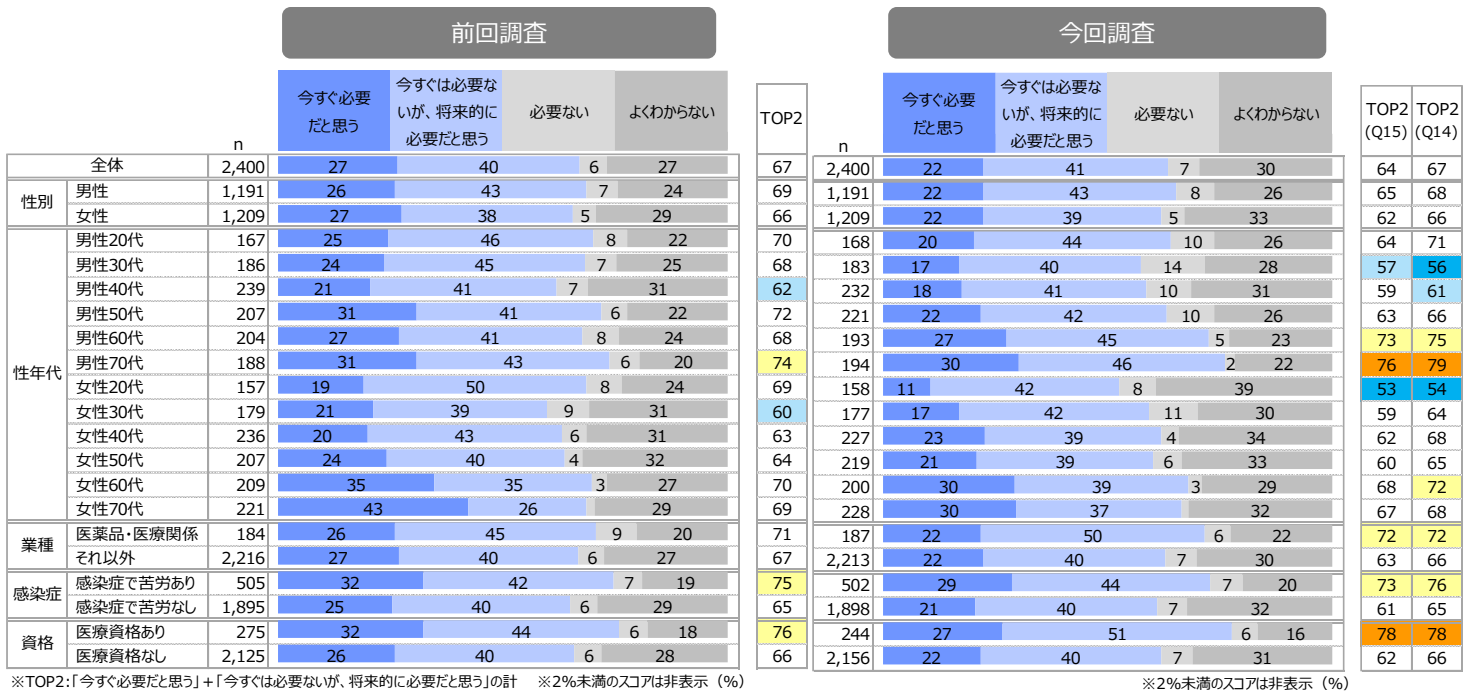
Q13.プル型インセンティブの財源が税金だった場合、プル型インセンティブの必要性についてお知らせください。

プル型インセンティブとは：通常の薬の開発は、企業が研究開発投資を行って、上市後製品を売り上げることで投資を回収しています。一方、抗菌薬は、使用条件を限定して使う必要があることから、企業が事業の持続可能性を見込めず、新規抗菌薬の開発が進んでいないのが現状です。これを解決するために、使用量に関係なく、開発企業への売り上げ等を補償するような制度（プル型インセンティブ）などが提案されています。

考察：

プル型インセンティブの財源が税金でも「今すぐ必要だと思う」は前回よりも5ポイント減の22%だった

- 財源が税金になった場合、TOP2*や「今すぐ必要だと思う」の割合は前回とほぼ同程度の減少を示した。TOP2*、「今すぐ必要だと思う」の前問からの減少の程度は、ともに前は4ポイント減、今回は3ポイント減。
- 財源が税金になることで、“男性20代”や“女性30～50代”でTOP2*の割合が減少する傾向が見られた。



Q14.プル型インセンティブの必要性について「{Q13 回答(文)}」と回答しましたが、その理由をお知らせください。

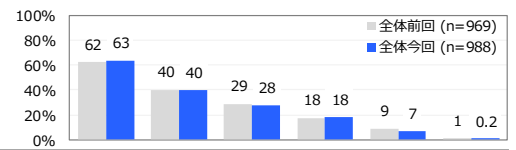
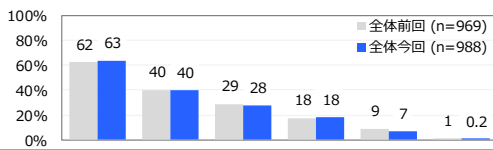
<「今すぐは必要ないが、将来的に必要だと思う」理由>

考察：

プル型インセンティブが今すぐは必要ないが、将来的に必要だと思う理由は、前回と同様、「薬の開発には時間とコストがかかるから」

- 「今すぐは必要ないが、将来的に必要だと思う」理由としては、前回と同様、「薬の開発には時間とコストがかかるから」の割合が最も高く、次いで「将来的に大きな脅威であるから」であった。
- どのセグメントでも「薬の開発には～」の割合が最も高かったが、“女性”“医薬品・医療関係”“医療資格あり”のセグメントでより割合が高かった。性年代別では“男性20代”で全体よりも10ポイント以上低く、“女性40、70代”で10ポイント以上高かった。なお、“男性20代”では「緊急の課題ではないから」の割合が高い傾向が見られた。

ベース：プル型インセンティブ「今すぐは必要ないが、将来的に必要だと思う」



		n	理由						
			薬の開発には時間とコストがかかるから	将来的に大きな脅威であるから	国の財政状況が厳しいと聞いているから	緊急の課題ではないから	研究開発を支援すれば十分と感じるから	その他	
全体	今回	988	63	40	28	18	7	0.2	
	前回	969	62	40	29	18	9	1	
性別	男性	今回	511	58	43	25	20	6	0
		前回	507	58	42	24	21	10	1
	女性	今回	477	69	36	31	16	7	0.4
		前回	462	67	38	34	14	8	1
性年代	男性20代	今回	74	47	35	30	8	0	
		前回	76	36	45	28	30	11	0
	男性30代	今回	74	54	32	35	19	5	0
		前回	83	58	39	27	27	14	0
	男性40代	今回	95	67	41	23	24	1	0
		前回	99	60	40	25	13	8	2
	男性50代	今回	92	58	49	20	12	7	0
		前回	85	59	39	29	27	11	0
	男性60代	今回	87	56	57	21	17	6	0
		前回	83	60	49	23	19	8	1
	男性70代	今回	89	64	42	22	21	10	0
		前回	81	73	42	15	15	10	1
	女性20代	今回	66	64	30	32	23	9	0
		前回	78	62	31	37	19	5	3
女性30代	今回	75	61	35	33	24	7	0	
	前回	69	67	35	38	17	9	0	
女性40代	今回	89	76	35	42	13	6	2	
	前回	102	70	33	35	16	6	2	
女性50代	今回	86	66	34	20	14	6	0	
	前回	82	67	40	28	9	10	1	
女性60代	今回	77	68	35	23	10	8	0	
	前回	73	66	45	36	12	5	0	
女性70代	今回	84	74	46	36	12	8	0	
	前回	58	72	47	26	7	16	0	

※今回全体で降順ソート (%)

		n	理由						
			薬の開発には時間とコストがかかるから	将来的に大きな脅威であるから	国の財政状況が厳しいと聞いているから	緊急の課題ではないから	研究開発を支援すれば十分と感じるから	その他	
全体	今回	988	63	40	28	18	7	0.2	
	前回	969	62	40	29	18	9	1	
業種	医薬品・医療関係	今回	93	72	39	18	14	9	1
		前回	82	50	39	34	24	6	1
	それ以外	今回	895	62	40	29	19	6	0.1
		前回	887	63	40	28	17	9	1
感染症	感染症で苦勞あり	今回	222	62	44	32	25	9	1
		前回	214	57	43	26	21	11	1
	感染症で苦勞なし	今回	766	64	39	27	16	6	0
		前回	755	64	39	30	17	9	1
資格	医療資格あり	今回	125	69	38	32	17	6	1
		前回	120	58	38	36	23	5	1
	医療資格なし	今回	863	62	40	27	18	7	0.1
		前回	849	63	41	28	17	10	1

※今回全体で降順ソート (%)

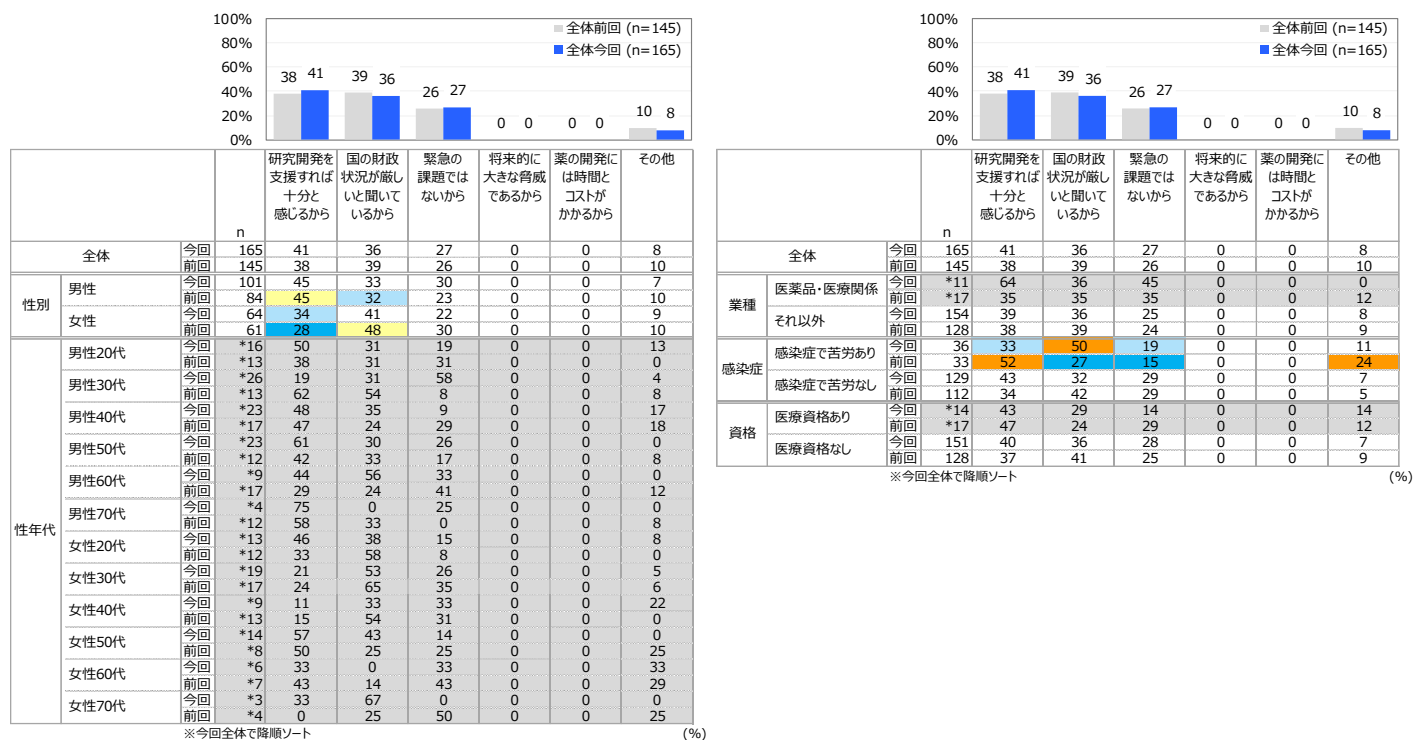
< 「必要ない」理由 >

考察：

プル型インセンティブが必要ない理由は「研究開発を支援すれば十分と感じるから」の割合が最も高かった

- “必要ない”理由としては、「研究開発を支援すれば十分と感じるから」の割合が最も高く、次いで「国の財政状況が厳しいと聞いているから」であった。
- セグメント別では、“男性”で前者「研究開発を～」、 “女性”で後者「国の財政～」の割合が高く、“感染症で苦労あり”で今回は後者、前回は前者の割合が高かった。

ベース：プル型インセンティブ「必要ない」



Q15.以下の内容をお読みになり、あなたのお考えをお知らせください。新たな抗菌薬はしばしば消火器にたとえられます。消火器は、普段は使わないものですが、火事の際に備えて常に準備し、必要に応じて新たなものに交換します。抗菌薬に対して耐性菌は常に一定程度の確率で発生するため、新たな抗菌薬を用意し続けることが社会経済を支えるためにもとても重要です。このことを受けて、プル型インセンティブの必要性へのお考えは変わりましたか。

考察：

プル型インセンティブの必要性への”考えが変わった”割合は26%

- 「考えが変わった」の割合は26%であった。
- セグメント別では、性年代は”男性20代”、感染症の苦勞の有無別では”感染症で苦勞あり”で「考えが変わった」の割合が高かった。性別、業種、資格の有無別では、殆ど差は見られなかった。

		n	考えが変わった	考えは変わらない	わからない
全体		2,400	26	38	36
性別	男性	1,191	26	42	32
	女性	1,209	25	35	40
性年代	男性20代	168	37	35	28
	男性30代	183	22	43	34
	男性40代	232	23	41	36
	男性50代	221	19	47	33
	男性60代	193	27	42	31
	男性70代	194	30	43	27
	女性20代	158	22	36	42
	女性30代	177	23	41	36
	女性40代	227	27	32	41
	女性50代	219	23	32	45
	女性60代	200	28	35	38
女性70代	228	27	35	38	
業種	医薬品・医療関係	187	28	43	29
	それ以外	2,213	25	38	37
感染症	感染症で苦勞あり	502	34	41	25
	感染症で苦勞なし	1,898	23	38	39
資格	医療資格あり	244	29	47	25
	医療資格なし	2,156	25	37	37

※2%未満のスコアは非表示 (%)

Q16.日本を含め世界では薬剤耐性（AMR）の理解・対策を広める活動が行われています。以下内容のうち、ご存知の内容をすべてお知らせください。（いくつでも）

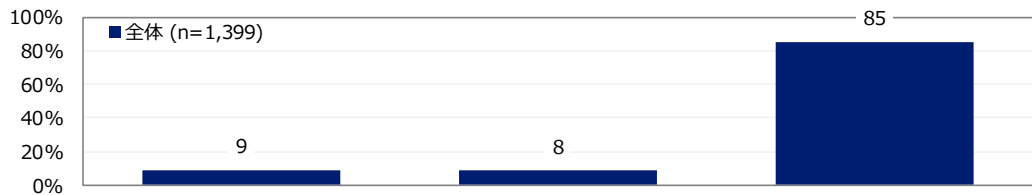
薬剤耐性とは：細菌やウイルスに対して、それまで効いていた薬が効かなくなる（効果が小さくなる）こと

考察：

以下の内容について認知している割合は、ともに1割程であった。

- ・毎年11月は日本政府が定める薬剤耐性（AMR）対策推進月間であること
- ・毎年11月18日から24日は、WHOが定める世界薬剤耐性（AMR）啓発週間であること

- 以下の内容の認知率は、ともに1割程であった。
- セグメント別の認知率は、性別では”男性”、性年代では”男性20、30代”、感染症の苦勞の有無別では”感染症で苦勞あり”、資格の有無別では”医療資格あり”の方が認知率が高かった。業種別では差は見られなかった。



		n	毎年11月は日本政府の定める 薬剤耐性（AMR）対策推進月間 であること	毎年11月18日から24日は、 WHOが定める世界薬剤耐性（AMR） 啓発週間であること	上記について、 知っている内容はない
全体		1,399	9	8	85
性別	男性	697	13	12	79
	女性	702	5	5	91
性年代	男性20代	99	26	28	57
	男性30代	90	20	11	74
	男性40代	130	11	18	77
	男性50代	134	8	7	85
	男性60代	121	8	7	87
	男性70代	123	9	2	89
	女性20代	78	10	12	81
	女性30代	103	7	5	90
	女性40代	130	8	9	86
	女性50代	130	3	4	94
業種	医薬品・医療関係	155	9	9	85
	それ以外	1,244	9	8	85
感染症	感染症で苦勞あり	378	16	19	71
	感染症で苦勞なし	1,021	6	5	90
資格	医療資格あり	219	18	15	72
	医療資格なし	1,180	7	7	87

※全体で降順ソート

(%)